

## B-35) Congenital brain tumor の1治験例

嶋村 則人・関谷 徹治  
浅野研一郎・田中 雅彦 (弘前大学)  
鈴木 重晴 (脳神経外科)

患児は在胎40週2日で吸引分娩にて出生。Apgar 8/9点、頭囲 34.0 cm、体重 3100 g であった。しかし、生後1日目より啼泣少なく、黄疸、発熱、大泉門膨隆が認められ、生後4日目に Apgar 2点となった。頭部 CT, MRI にて左大脳腫瘍 (48×40×48 mm) および腫瘍内出血を認め、当科紹介となった。生後10日目で頭囲 35.3 cm、体重 2916 g であり、体力の回復を待って生後22日目に脳腫瘍全摘出術施行した。H-E 染色で astrocytoma grade 3 と診断され、VEP 療法を追加した。その後、外水頭症を併発し術後2ヶ月目に S-P shunt を施行。術後4ヶ月の現在、再発なく麻痺も認めず寛解状態を保っている。また、免疫組織学的検索にて Neuroblastoma と思われる所見も認めており、更なる組織学的検索を行っている。

## B-36) Hemangioblastoma 診断における 201-thallium SPECT の有用性

近藤 健男・隈部 俊宏  
城倉 英史・池田 秀敏 (東北大学)  
白根 礼造・吉本 高志 (脳神経外科)

Hemangioblastoma (HB) に 201-thallium ( $^{201}\text{Tl}$ ) SPECT を施行し、HB の鑑別診断における有用性を検討した。〈対象および方法〉5例の後頭蓋窩 HB と4例の HB 以外の強い造影効果を有する後頭蓋窩腫瘍 (control) を比較検討した。 $^{201}\text{Tl}$  を静注し、15分後 (early image) と3時間後 (delayed image) に撮像を行った。腫瘍部の  $^{201}\text{Tl}$  の取り込みを正常部位との比で換算し、Tl index, early image ( $\text{Tl}_E$ ), delayed image ( $\text{Tl}_D$ ) とした。また retention index (REI) を計算し、比較検討を行った。REI =  $(\text{Tl}_E - \text{Tl}_D) / \text{Tl}_E$ 。〈結果〉 $\text{Tl}_E$  は HB で  $2.75 \pm 0.63$ , control で  $3.94 \pm 1.93$  (mean  $\pm$  SD) と両群間に有意な差を認めなかった。 $\text{Tl}_D$  は HB で  $1.62 \pm 0.43$ , control で  $3.09 \pm 1.37$  と HB において低い傾向であったが、有意な差を認めなかった。REI は HB で  $0.41 \pm 0.08$ , control で  $0.20 \pm 0.07$  と HB において統計学的に有意に高値であった ( $p < 0.01$ )。〈結語〉HB においては、 $^{201}\text{Tl}$  は early image で中等度の取り込みを認めるが、早期に腫瘍から wash out され、

delayed image においてはほとんど取り込みを認めなかった。 $^{201}\text{Tl}$  SPECT による REI の算出が、HB を他の造影効果を有する腫瘍との鑑別に有用であった。

## B-37) 胚芽腫にたいする ICE 療法の効果

川上 圭太・嘉山 孝正  
櫻田 香・斎野 真 (山形大学)  
斎藤伸二郎 (脳神経外科)

胚芽腫に対する Isofamide, CDDP, Etoposide 併用による化学療法「ICE 療法」の効果について報告する。(対象/方法) 過去2年間に当科で経験した、生検により組織の確定した胚芽腫2例と原発巣の組織が確定している播種例3例に対して行った ICE 療法の効果と副作用に関して検討した。薬剤投与量は、原則として松谷らの厚生省班会議のプロトコルに準じた。放射線療法に関しても同様である。(結果) 5症例とも ICE 療法開始後7-10日の画像評価で、すでに著明な腫瘍縮小効果を認めた。さらに、3サイクル終了時には4例で CR を得た。脊髄播種を呈した1例は放射線療法を追加したが PR であった。また、この症例は ICE 療法3サイクルと4サイクルの間の4ヶ月間に更に第3脳室底への播種を呈した。副作用に関しては、全例で骨髄抑制が生じたが、GCSF 等の投与で全例回復した。出血性膀胱炎は認めていない。(結語) ICE 療法は胚芽腫に対して極めて有効だが、一部の ICE 抵抗性の胚芽腫の治療が今後の課題と考えられる。

## B-38) 髓芽腫に対する化学放射線療法を用いた集学的治療

池田 潤・浅岡 克行  
石井 伸明・澤村 豊 (北海道大学)  
阿部 弘 (脳神経外科)

髓芽腫治療の予後改善を目的として、1991年より prospective study として行っている、ICE (IFO/CDDP/VP-16) 化学療法と放射線療法併用プロトコルの治療成績を報告する。対象は、過去8年間に経験した髓芽腫16例で、年齢は、8ヶ月から12歳 (平均5.6歳) である。診断後早期に全摘出を目指して手術し、術後早期より ICE 療法を開始し、4週間隔で8回行うことを原則とした。2.5歳未満の症例では化学療法を先行し、2.5歳となつてから照射を行い、2.5歳以上では、全脳脊髄照射を化学療法に平行して行った。初期効果判定時の